【187】

氏　名(本　籍)	藤原保明(ふじわらやすあき)(三重県)
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　658　号
学位授与年月日	平成3年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	古英詩韻律研究

主　査	筑波大学教授	Ph.D.	中右　実
副　査	筑波大学教授	Ph.D.	原口庄輔
副　査	筑波大学教授		島岡　丘
副　査	筑波大学教授		松本克己
副　査	筑波大学教授	文学博士	中山恒夫

論　文　の　要　旨

古英詩は，他のゲルマン古詩と同様に，頭韻，半行構造，行の長さの不統一など，十指に余る顕著な韻律特徴を備えている。このような古英詩について，百年以上も前から本格的な研究がなされ，さまざまな韻律論が提案されてきたが，どの枠組みも多様な韻律現象の記述と分類の域をあまり出ず，その根底にある韻律構造を体系的に説明するような一般理論を提供するものではなかった。このような背景のもとで，本論文は，古英詩の韻律現象について綿密で行き届いた考察を加えることによって，その韻律構造の本質を解明し，その全容を統一的に捉える新しい理論的枠組みを提唱したものである。

まず，本論文の構成は，全体で大きく五つの章からなっている。「序章　古英詩と韻律」，「第Ⅰ章　古英語の語強勢」，「第Ⅱ章　古英詩の押韻」，「第Ⅲ章　古英詩のリズム」，「第Ⅳ章　頭韻詩のための新韻律論」，そして最後に，まとめとしての「終章」がくる。なかでも第Ⅳ章が本論文の中核部分をなし，全体の半分の分量を占めている。

第Ⅰ章は古英語の語強勢の型と機能を，非線状音韻論の枠組みに基づいて分析する。著者が何よりもまず語強勢の型と機能に着目するのには明確な動機がある。それはすなわち，古英詩には一語だけで構成されている半行が多いことである。この事実に着目すると，語強勢の型と半行の韻律型が密接な関係にあることが推測される。

その分析の結果，古英語の最も自然な語強勢の型はSW（強弱）であり，それに対し，WS（強弱）の型は頻度が低く，その分布は完全に予測可能であり，さらにまた，いずれのSの直前にも必ず語境界が生ずる，ということが明らかとなる。一語からなる半行では，頭韻は必ずSの位置に生じるた

め，語強勢の型は頭韻によって崩されるということがないので，この部類の半行では，語の強勢型と半行の韻律型は完全に一致し，ともにSWとなる。また一方，複数の語からなる半行においても，古英語の語強勢の型と機能がきわめて明白なため，同じくSWという韻律型が実現するものと予測される。

第Ⅱ章は，従来の研究が古英詩の韻律現象をどのように捉えてきたかを検討し，押韻に関して解きえないさまざまな問題が山積していることを明らかにする。第一に，古英詩の押韻はほとんどが頭韻であり，脚韻はごくまれである。そして押韻は，一般に「同一音の繰り返し」とみなされているが，古英詩の場合，ほとんどの母音の頭韻例では，音価の異なる母音が繰り返されるし，また一方，子音連結の場合にも，ただ /s/＋閉鎖音だけが2子音とも繰り返されるのを除けば，ほかは最初の子音だけが一致することが観察されるので，「同一音の繰り返し」という原則は崩れるのである。ところが，これまで満足のゆく頭韻の定義が出されていない，というのが実情である。また第二に，頭韻は語の最大強勢を担う音節にのみ生じるとする説と，副強勢音節にも生じるとする説とが相対立している。第三に，半行の頭韻形式には単一頭韻と二重頭韻の現象があり，しかも二重頭韻は第一半行においてのみ観察されるが，この分布の特異性には何ら妥当な説明が与えられていない。第四に，押韻は特定の語彙範疇によく現われ，しかも半行の左側に生じやすい，などの特徴が認められるが，これらがどのような原則に従っているのか，諸家の意見ははっきりしない。もっとも，第五に，頭韻の果たす機能については，ただ「頭韻の左右の半行を結ぶ」という連結機能を認める点でのみ，学者の意見は一致している。しかし，半行を結ぶのが頭韻の目的であれば，単一頭韻だけで十分なはずで，二重頭韻が生じる事実については説明がつかない。さらに各行は，そもそも，なぜ半行に分かれているのか，それにも説明がつかない。

続いて第Ⅲ章では，最も注目すべき四つの既存の枠組みが取り上げられ，古英詩のリズムに関する問題点が指摘される。検討の対象となる枠組みは，ゲルマン古詩の標準的韻律理論と目されているSievers (1893), Sievers (1893) の代表的修正案とされるBliss (1962, 1967)，これら伝統的立場とは対峙される生成論的立場から新しい枠組みを提案したHalle & Keyser (1971)，そして最後に，最近のまとまった韻律論の代表格Russom (1987) の四つである。著者はこれらの枠組みを逐一詳細に検討し，いずれにも共通して，半行の韻律構造の分析が甘く，韻律上の解釈や単位の設定に不備があり，語強勢の型や機能を無視するなど問題が多く，古英詩のリズムの全体像を適切に捉えるには至っていないことを明らかにしている。

次に第Ⅳ章では，従来の所説の不備を補い，多様な韻律現象を統一的に説明しうる独自の枠組みを提案し，その妥当性を検証する。本章が全体の中核部を構成し，分量も本論文全体の半分以上を占める。

まず第一に，半行と長行の韻律型の成立について考察する。なによりもまず，古英詩には頭韻という現象が観察される。ここでただちに，古英詩人はなぜ作詩上頭韻というような手段を用いたのか，という素朴な疑問が浮かび上がってくる。すでに明らかなように，語はSWという自然な強勢型をもつが，韻文の場合にも，詩人はこの語強勢型と同じものを，語よりも大きな半行と長行の単位にも実

現させようとしたからこそ，その手段として頭韻を用いたのであると著者は推断する。たとえば，長行が四つの語からなる場合を考えてみると，それを語レベルでみるかぎり，S_1W_1, S_2W_2, S_3W_3, S_4W_4のような，音価の等しい四つのSWの連続体からなるにすぎない。しかし，実際にはそれらの間には，聴覚的印象（プロミネンス）の違いがある。つまり，このなかでS_1とS_3が頭韻することによって，それらのプロミネンスが頭韻しないS_2とS_4のそれよりも高くなり，その結果，その上部に二つのSWの韻律単位が実現する。さらに，語強勢のSの左側には必ず語境界があるので，それと平行的に，この上部の韻律単位にもSの左側には境界が生じ，その境界によって二つの半行が成立するものと考えられる。

この仮説は詩人の言語直観にかなうばかりでなく，いくつもの懸案を解決する基盤を提供する。すぐ上でみた上部レベルの二つのSWの単位は，それぞれが半行に対応し，ゲルマン古詩に共通の半行構造の成立に決定的な説明を与える。頭韻音節（または語）は常に半行の左側に現われやすいという事実も，これによって説明がつく。そして何よりも，「頭韻は左右の半行を結ぶ」という通説とは裏腹に，「頭韻は長行を左右の半行に分ける」という，より本質を突いた説明が可能となる。また一方，二重頭韻についても，プロミネンスを用いることによって明快な説明ができる。すなわち，詩人は左側のSWのプロミネンスを右側のSWよりも大きくし，結果的に長行全体がSWとなるように，第一半行に頭韻音節を二つ配置したと考えられる。かくして，二重頭韻はなぜ第一半行に偏在するかという，これまで解き得なかった疑問に自然な答えを与えることができる。

第二に，頭韻は副強勢も関与しうるとする伝統的な見方が否定される。というのも，頭韻には語の最大強勢だけが対応することが実証されたからである。さらにまた，「同一音の繰り返し」という伝統的な頭韻の定義もまた大きく崩れる。というのも，子音連結の一部と母音の頭韻の場合には，音が一致しない例が多発しているからである。そこで著者は，言語音固有のきこえ度（sonority）という尺度に着目し，「強勢音節の初頭のきこえ度が最も小さい部分が頭韻に加わる」という原則を立てれば例外はいっさい生じない，ということを明らかにする。

第三に，頭韻と語彙範疇の関係について新しい提案がなされる。半行中の語の中から一つないし二つの語を選んで頭韻させる場合，古英詩人は無作為にこの選択をしたのではなく，何らかの原則に従ってそうしていたはずであるが，従来の研究ではこの点が十分に明らかにされていなかった。そこで著者は，第一半行が単一頭韻を含む場合に着目し，*Beowulf* を含む5編の詩を精密に分析し，その結果，「頭韻階級の原則」を導き出すに至っている。この原則は語彙範疇の種類に応じて頭韻の可能性に格差があることを確定したもので，これはただ頭韻語の選択だけでなく，語彙の範疇化や機能，語形成の過程などに新たな視野を拓くものである。とりわけ古英語の副詞について，その範疇と機能の明確化に決定的な意味をもつことが実証的に示されている。

ほかには，まず，音節分解や拡大半行など，これまで不可欠とされた解釈の仕方や単位は，新しい枠組みでは不要であることが論証される。次に，古英詩以外の頭韻詩にも新しい枠組みが援用され，それらの詩の韻律構造にも新たな解釈の視点が与えられる。

審　査　の　要　旨

本論文は，古英詩の韻律現象について，著者の過去十年間にわたる本格的な研究の成果をまとめたもので，わけても，古英詩の韻律構造を包括的に記述し説明する新しい理論的枠組みを提案したものである。その枠組みの骨子は，自然な語強勢の型SWと同一の韻律型が韻文の半行と長行にも実現するとするもので，これによって，これまで説明のつかなかった半行構造や頭韻の分布など，際立った韻律上の特徴を余すところなく説明し，さらに根源的には，古英詩人の作詩の動機と原則を的確に捉えることを可能にしている。

本論文は，先行研究の方法論的不備を明確に確認したうえで，いくつかの新しい分析の方法と方針を採用している。まず第一に，従来の分析のほとんどが*Beowulf*（3182行）だけを考察の対象としていたのに対し，本論文では古英詩全体のほぼ半分に達する16編（合計14,398行）に対象を拡大し，他のゲルマン古詩や中英語期の頭韻詩も可能なかぎり多く扱ったこと。第二に，従来の韻律解釈が線状的であったのに対し，本研究は非線状音韻論の枠組みに従い，その理論的枠組みの知見を大いに活用したこと。第三に，従来の研究が頭韻や半行構造について，その成立と根拠に疑問をいだくことなく，それをあらかじめ与えられた既成事実として，そこから出発したのに対し，本論文はむしろ，その成立と根拠にさかのぼり，それを問うことから出発し，より根源的な答えを求めたこと。このように本論文は，方法論的にも納得のゆく独自の立場を明確に打ち出している。

著者の研究の方法は徹底して実証的で手堅いものである。しかしそれは，事実観察の細部をただそのまま記述するというにとどまらず，さらにそれを説明する一般的枠組みを構築したところに最大の意義がある。そしてまた，先行研究に対しても，徹底的な批判的考察を加えることによって，事実観察と理論構成の両面にわたる根本問題を明確に指摘し，その自然な延長線上に，その欠を補うものとして，著者の理論を位置づけている。論文全体の構成と提示の仕方と記述の文体は，著者の理論がどの既存理論とも異なる立場を形成していることを理解させるのに効果的であり，そして事実，十分に説得的であることが確認される。以上を総合していえば，本論文は質的に世界的水準をゆくもので，学界に独自の実質的貢献を果たしているものと高く評価される。

しかしながら，本論文で提唱された新しい説明の枠組みが学界で真に理解され，さらに広く容認されるようになるために，いまひとつ，指摘しておきたいことは，その理論の明示性ということである。端的にいって，ここで提唱されている理論的枠組みが全体として明確な輪郭を描くようには定式化されていない，という点である。記述的説明は十分に行き届いたものであるとはいえ，その全体像の構築はなお読者の側の努力に委ねられている。いま一歩突き詰めて，全体理論の内部構成の明示的定式化が試みられていたら，なお一層の説得力をもったであろうと惜しまれるのである。この目的のためには，必要とされる道具立ては，結局のところ，何と何であり，しかもそれらは理論全体の中でどのような関係にあるか，そういったことを明確にすることが何よりも肝要である。

推察するに，韻律領域（韻律レベル）と韻律単位と韻律過程（領域間の連結方式）ということばで区別できるような道具立てはどうしても必要であると思われる。韻律領域には語と半行と長行という

三つの領域が区別される。そのなかで，語の領域が最下位レベル，長行の領域が最上位レベルであり，その中間レベルに半行の領域がある。最下位の語領域の韻律型が最上位の長行領域にまでそのまま持ち越される，という一般化が成り立つので，語に固有な強勢単位 S と W，ならびに語に典型的な SW の強勢型が有意味な韻律単位となる。そのほかに，著者が半行レベルの韻律型の決定にプロミネンスという概念を援用しているが，これが果たして韻律単位として別個に必要なものか，あるいはそうではなく，語から半行への派生過程で働く条件として規定されるべきものではないか，といったことが改めて問われなければならない。そしてまた，著者のいう「頭韻階級の原則」は全体の中にどのように位置づけられるか，たとえば，ある特定の派生過程で働く条件として規定されるものかどうか，といった問いも改めて考えてみなければならない。以上は骨格構造の見取り図にすぎないが，その基本線は著者の主張に沿うものであり，この方向で明示的定式化が試みられれば，著者の枠組みは説明理論として一段と説得力をもつことが期待される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。